

# 『逃げる』

橋本  
夏

キャベツ農家を営む政岡順二（73）は、認知症になった妻の雪（69）と二人暮らし。そんな政岡には、運転免許証の有効期限が1年以上前に切れているという秘密が。しかし、他人に頼ることが嫌いな政岡にとって、介護や農作業のためには車はなくてはならない。そのため誰よりも安全運転を心がけ、ひっそりと生活していた。

そんな矢先、政岡はブレーキランプが切れていると警察に止めらる。なんとかその場は嚴重注意で逃れたものの、その直後、中国人農業研修生の林美雨リンメイユイ（23）とぶつかってしまった。年貢の納めどきかと、警察に電話しようとするが、怪我をしたリンから「助けて」と頼まれる。リンは、ほとんど奴隷のような労働条件に耐え切れず、雇い主である富田剛（60）の農場から逃げ出してきたのだ。政岡は仕方なく一晩だけリンを匿うことにする。

リンから隣のスーパーで働いている恋人のところまで送って欲しいと頼まれるが、警察や富田たちに見つかることを恐れた政岡は断る。リンは、それなら足の怪我が治るまで置いてくれと頼み、代わり

に雪の介護を手伝うと提案する。二人の共同生活が始まる。

一方、リンに逃げられた富田は、研修生を農家に派遣している協同組合の境（40）と共に、リンの行方を追っていた。そして、政岡の行動が最近おかしいという噂を聞きつける。

そんな中、雪が突然失踪。ブレーキランプが切れているにも関わらず車で飛び出した政岡は、富田の車と追突事故を起こして逮捕されてしまう。それを知ったリンは、自分の力で逃げ出そうとして、村人に捕まってしまう。

免許は没収されたものの、一晩で警察から釈放された政岡。リンが捕まり、今日中国に強制的に帰国させられると知る。他人に頼り、他人から頼られることも必要だと学んだ政岡は、最後にリンのために無免許で運転することを決める。リンを奪還し、彼の所へ連れて行くため、富田たちの前に立ちふさがる。

登場人物

政岡順二（73）農家

林美雨（23）リンメイユイ 中国人農業研修生

富田剛（60）農家 富田農園経営者

境正道（40）協同組合員 人材斡旋業

茂木宏（53）ガソリンスタンド経営者

政岡百江（50）政岡の妹 介護施設職員

政岡雪（69）政岡の妻

青木誠治（25）警察官

王秀英（28）ワンシウイン スーパー店員 リンの恋人

行員

村民 A

村民 B

村民 C

女性店員

ガソリンスタンド店員

協同組合職員 A

協同組合職員 B

警察官 A

警察官 B

○雑木林

足を引きづりながら走る女の後ろ姿。追ってくる誰かを気にするように振り返る。林美雨リンメイユイ(23)。(以降リンと表記)作業着風のジャケットを羽織り、キャップをかぶっている。キャップが風に舞い、黒い髪と日焼けした肌があらわになる。

○雑木林に面した農道

一台の軽トラックがゆっくり走る。スピードメーターはおよそ30キロほどを指している。運転しているのは政岡順二(73)。日に焼けた肌や服装で農家とわかる。突然、茂みの中からリンが飛び出してくる。

リン「！」  
政岡「！」

政岡、慌ててブレーキを踏む。  
車と人がぶつかる鈍い音。

○農道と踏切前

田んぼや畑に囲まれた道を、政岡の運転する軽トラックがゆっくり走っている。トラックの荷台にはキャベツの入ったダンボール。

T 『一時間前』

助手席には政岡雪(69)がふわふわとした子供のような笑顔で座っている。軽トラ、踏切に差し掛かり、踏切前で一時停止する。ブレーキランプが光っていない。

政岡、わざわざ窓を開け、左右を確認した後、再びゆっくり走り始める。大きなクラクションを鳴らし、別の軽トラが、政岡の軽トラを追い越していく。その荷台には、日に焼けたアジアの農業

研修生たち。皆同じようなキャップをかぶり、疲れきった表情。  
その中の一人が、政岡をじっと見ている。  
政岡、思わず目をそらす。

○デイサービスセンター『わかば苑』・前

軽トラの助手席から、雪を降ろしている  
政岡。どこか危なっかしい。

介護スタッフの制服を着た政岡百江  
(60)が、それを心配そうに見ている。

百江「送迎、こっちでやるのに」

政岡、無視して、雪を支えようとする  
が、雪が段差につまづきふらつく。

百江が慌てて雪の体をきちんと支える。

百江「：お兄ちゃん、そうやって全部自分でやろうとしないで。もっと頼っていいんだよ」

政岡「女房も畑も、他人に任せるくらいなら、俺は死ぬ。こいつもそう思ってるはずだ」

百江「：：」

政岡、荷台からキャベツが入った箱を降ろす。箱の中のキャベツには所々虫食いがあり、あまり出来が良いとは言えない。

百江、それを見て。

百江「それ、本当に義姉さんのこと考えて言ってるの？ このままじゃ全部中途半端になっちゃうだけでしょ」

政岡「：：」

政岡、ニコニコ笑う雪を見る。

百江「考えてみたら？ 前話したホームの件家で一人留守番させるより安全だと思うけど」

政岡「：：：そんな金はない」

百江「嘘。お義姉さんしっかりしてたもん。いざという時の貯金はちゃんとあるって」

政岡「：：：」

百江「せめて、今日のケアが終わったら、帰りは、うちの車で送らせて。ね？」

政岡「：：：わかった」

○同・軽トラ・車内  
バックミラーに、百江に支えられて立つ雪が映る。笑顔で手を振っている。政岡、いたたまれなくなり、無言で発車する。  
助手席に置かれた特別養護老人ホームのパンフレットに目をやる。『入居費用200万円』の文字。  
政岡「(思案し)……」

○富田農園・作業場  
同じような作業着を着た外国人研修生達が、キャベツの出荷作業をしている。その中に、リン。  
隣の女性と中国語で楽しげに会話する。  
富田剛(60)が不機嫌な様子で来る。  
富田「口動かす暇あったら手動かせ、バカもん」  
一瞬で静かになる作業場内。  
富田「リンさん、ちよつと」  
リン、表情を硬くし立ち上がる。

○同・事務所  
ソファに座っているリン。  
その向かいには富田と、スーツを着た境正道(40)。  
富田「あんた、携帯、持ってるでしょ」  
リン「……」  
富田「実習生は携帯の所持禁止。出して、ほら。はやく！ けいたい、わかる？」  
境「リンさん、正直に渡してくれば、何もしませんから」  
リン、ポケットから携帯を出して置く。  
素早く奪いとる富田。堂々と中身をチェックする。  
富田「昨日どこ泊まった？」  
リン「……」  
富田「あんた、男がいるだろ？」  
うつむくリン。  
ため息をつく境と富田。

境「リンさん、ここに来る時、この誓約書にサインしたの覚えてるよね？」

境「ほら、ここ。期間中に恋愛をした実習生には、違約金50万を徴収、抵抗する場合は帰国させる」

リン「(以降、片言ながら日本語)私、まだ帰れません。お金、全然足りません」

富田「だったら男にサカってないで働けつて！ なんのために日本に来たんだよ！」

境「富田さん。会話を隠し録りされてるとま

ずいですから」

リン「………働いてます」

富田「なに？」

リン「私たち、いっぱい働いてる。夜までも、給料安い。休みの日、なにしても自由。違いますか？」

富田「まったく、そういう日本語だけはいっちょよまえに上手くなりやがって」

リン「本当のこと」

富田「うるさい！」

境「リンさん、契約違反は契約違反です。罰金を払ってその彼と別れるか、中国に帰るかです」

リン「………」

境「別れてくれますね？」

リン、悔しさをこらえ、机の上に置かれた自分の携帯電話を取って立ち上がる。しかし、富田が携帯を素早く奪う。リン、絶望と悔しさがこみ上げる。

#### ○同・作業場

暗い表情でリンが作業に戻ってくる。富田と境、倉庫の入口付近でタバコを吸いながら談笑している。

それを見つめるリン。突然立ち上がる。隣の女性研修生と目があう。



研修生、無言で頷く。

リン「(中国語で) さよなら」  
その場を離れ、裏口から出て行く。

○同・前・道

リン、全速力で走っている。

○銀行・窓口

行員と向かい合い、払戻請求書に記入している政岡。金額欄に200万と記入。

行員「こちらに日付もお願いします。えーつと今日は、平成28年9月12日」

政岡、それに従い記入する。

行員「政岡様、本日はお顔のわかる身分証明書をお持ちですか？」

政岡「……」

行員「今回は奥様の口座からの引き出しですので、これだけ高額ですと、規則として本人確認が必要で。免許証で結構ですが」

政岡「……やめる」

政岡、突然立ち上がり出て行く。  
不思議そうに見送る行員。

○同・駐車場

駐車してある軽トラの中で、自分の免許証を眺めている政岡。

『平成27年5月7日まで有効』のゴールド免許。

政岡、免許証と老人ホームのパンフレットを乱暴にグローブボックスに押し込む。

○国道

道の左右に『全国交通安全週間』と書かれた蛍光色のノボリ。

政岡、制限速度を守り、左右を注意して運転している。

バックミラーに、原付に乗った警察官、青木誠治(25)が映る。

政岡のハンドルを握る手に力が入る。  
青木「(後方から叫ぶ) 政岡さん、ちよっと停  
まってるー」

政岡「……」

×

×

×

青木「いつも安全運転にご協力ありがとうございます  
ございます」

政岡「青木くんこそ、ご苦労様」

青木「こちらの人間、交通安全週間って文字、  
読めないんですかね。今日も平気で荷台に  
人乗せて走ってたもん。ちよっとは政岡  
さんの運転、見習ってほしいよ」

政岡「俺のとは研修生いないから。それで  
何か？」

青木「あ、そうそう。政岡さん、切れてます  
よ。ブレーキランプ」

政岡「！」

驚いて後ろを見るが、自分では確かめ  
ようがない。

青木「いやー残念だな、政岡さんに違反切符  
を切る日が来るなんて」

青木「違反切符の端末に手をかける。」

政岡「……青木くん、実は」

政岡「諦めた様子でグローブボックス  
に手を伸ばそうとする。」

青木「なーんてね。いいですよ。今回は」  
青木「端末を閉じる。」

政岡「え？」

青木「え？ あ、なんか言いました？ 今」

政岡「いや……」

青木「ブレーキランプは自分では気づきにく  
いですからね。嚴重注意ってことで」

政岡「……」

政岡「そっと伸ばしかけた手をおろす。」

青木「ただし、この後すぐに取り替えに行っ  
てくださいね。今週は交通安全週間で、い  
つもとより取り締まり厳しくなってますから」

政岡「わかった」

青木「警察が気をつけてって言うのも変か。」

「ははは」

政岡「（苦笑い）……」

青木「あ、あと、富田さんのところから、研修生が一人逃げたんだって。中国人の女の子。見なかった？」

政岡「いや、見てない」

青木「そうですか。まあ僕らも民事不介入で、何もできないんですけど。見つけたら富田さんに連絡してあげてください」

政岡「わかった」

青木「じゃ、引き続き安全運転でお願いします」

青木、敬礼し去っていく。

政岡、ホッとして息を吐く。

○雑木林に面した道

全速力で走るリン。

木の根につまずき激しく転ぶ。スニーカーが片方脱げる。

そこに、近づいてくる車の走行音。リン、足を引きずりながら木の陰に隠れる。

高級そうなセダンが停まり、富田が降りてきてあたりを見回す。

林の陰で息を殺しているリン。

富田、スニーカーを拾い、電話をかける。始める。

富田「あー境さん。富田です。うん、今探してる。靴は見つけた。多分あいつの。：まだあんま遠くには行ってないと思う。うん、うん、わかった」

富田、電話を切ると、周囲を注意深く見つつ、車に乗り込み去っていく。リン、去っていく車を見て、ホッと息を吐く。と同時に、苦痛に顔を歪める。足首が腫れ、膝からも出血。痛みに耐えながら立ち上がる。

○雑木林

足を引きずりながら進むリン。

○雑木林に面した農道（冒頭のシーン）

茂みの中から、農道の様子をうかがっているリン。

背後から聞こえた物音に怯え、リン、農道へと飛び出す。

そこに政岡の軽トラが来る。

リン「！」

政岡「！」

政岡の軽トラとリン、ぶつかる。

×

×

×

政岡がハンドルから顔を上げると、軽トラの前に、リンが倒れている。

政岡おそるおそる降りてきて、リンに近づく。頭にかすり傷。

手首を掴み、脈があることを確かめる。

政岡「……年貢のおさめどきか」

政岡、諦めた様子でポケットから携帯を取り出し、電話をかけようとする。

リンが突然、政岡の腕を掴み返す。

政岡「！」

リン「（かすかな声で）……たすけて」

政岡、リンが着ているジャケットに『富田農園』の刺繍が入っていることに気がつく。

政岡「……」

政岡、周囲を見わたすが誰もいない。

○道

政岡の軽トラが荷台にカバーをかけて走っていく。

緊張した表情で軽トラを走らせる政岡。

○政岡家・庭

周囲を畑に囲まれた田舎の家。

庭の奥には、ガレージも兼ねた、作業場がある。

政岡の軽トラが入ってきて玄関の前で停まる。

政岡、降りてきて、荷台のカバーをめくる。荷台にはリンが横たわっている。

○同・二階・和室  
布団に寝ているリン。頭の怪我に応急処置が施されている。

○同・一階・居間  
電話機の前で佇む政岡。  
数字ボタンの1、1を押し、最後に0を押すかどう迷っている。  
電話機の横に飾られた写真が目に入る。笑顔の雪と、ムスっとした政岡のツーショット。幸せそうな一瞬。  
政岡、思い直して受話器を起き、電話帳をめくる。

○同・二階・和室  
リン、目を覚ます。  
慌てて起き上がろうとするが、足の痛みに顔を歪める。  
布団をめくると、足にも湿布と包帯が巻かれている。  
リン「(戸惑い)……」

○同・階段  
リン、足音を立てないよう、ゆっくり降りる。

○同・廊下・雪の部屋前  
リン、介護ベッドの置かれた和室を横目に見ながら、廊下を進む。  
縁側のガラス戸が開いているのに気がつき、そこから逃げ出そうとするが、よろけてガラス戸にぶつかる。

○同・居間  
電話帳で富田の番号を調べていた政岡。廊下の物音に気がつき、受話器を片手に音のした方へ。

○同・廊下  
政岡が近づくと、リンがうずくまって

いる。リン、恐る恐る顔を上げる。

政岡「起きたのか」

リン「……ここ、どこ」

政岡「どこって言われてもな。俺の家としか」

リン、政岡が手に受話器を持って、の気がつき、慌ててそれを奪おうと、政岡にすがりつく。

リン「ダメ、電話、ダメ」

政岡「なんだよ。離せ、おい」

リン「富田さんに電話、嫌です」

政岡「何があつたか知らないが、帰ってちゃんと話し合え」

リン「ダメ、あの人たち、話聞いてくれない。」

中国に帰らされて終わり」

政岡「俺には関係ない」

リン「関係ある。この村の野菜、私たちが作ってる」

政岡「俺は全部一人でやってる。お前らなんかの世話になつた覚えはない」

リン、政岡の足をしっかりとつかんで離さない。

政岡「離せて！」

リン「じゃあ、私、警察言います！」

政岡「な……」

政岡、思わず抵抗を緩める。

リン「あなたの車、私にぶつかった。私、怪我した。言います。あなた逮捕される、いいですか？」

政岡「……」

リン「私、知り合いに電話して迎えに来てもらう。それまで。誰にも言わないで。お願いします」

リン、真剣な眼差しで政岡を見ている。

政岡「……」

そこに、玄関から男の声。

茂木の声「政岡さん、いるー？」

リンと政岡、固まる。

○同・玄関

玄関先に茂木宏（53）が立っている。

ガソリンスタンドの制服を着ている。  
政岡、奥から現れる。

政岡「茂木くん、どうした」

茂木「悪いね急に。知ってる？ 富田さんとこの研修生、一人逃げたって」

政岡「（言うべきか迷う）……」

茂木「この子、リンって言うらしいんだけど」

茂木、リンの映った集合写真を見せる。

茂木「富田さん、俺の店まで来てさ、今後ガソリン入れた車にその子が隠れてないか調べろって言うわけ」

廊下の影で、リンは茂木と政岡の会話をうづくまって聞いている。

茂木「あと、今日そのことで集会も開くから人集めろって。人を駒のように使うのだけはうまいんだよ、あの人」

政岡「……なんで逃げたんだ」

茂木「詳しくは知らないけど、なんかその子、男がいたんだってさ。研修中は恋愛禁止って契約らしいよ」

政岡「……」

茂木「恋愛禁止って、今どきアイドルだってそんなルール守ってないでしょ。笑っちゃうよ」

政岡「……：：：茂木くん、ちょっといいか」  
政岡、家の奥を一瞬気にしつつ、茂木を連れて玄関の外へ出て行く。  
リン、その様子を緊張した面持ちで見ている。

○同・庭・作業場前

政岡と茂木が来る。

茂木「なんですか？」

政岡「実は……」

政岡、停めてある軽トラを見る。

○アーチ橋

国道へとつながる橋。

その出口付近に、富田と境、他数人の村人が立っている。出て行く車をいち

いち停め、その中の様子をチェックしている。

富田「ったく、どこ行きやがったんだ。ここ通らなきゃ、村の外には行けないはずだろ」境「突発的な行動でしょう。協力者がいたとは思えない。まだ、村のどこかに隠れている可能性も」

富田「絶対見つけ出してやる」

○政岡家・庭・作業場前

軽トラの運転席でブレーキを踏む政岡。その後ろで、ランプがつくか見ている茂木。

茂木「あー切れてるね。わかった。後でうちの店持ってきてよ。交換する」

政岡「すまん」

家の中から、リンその様子を見ている。少し安心した様子。

× × ×  
× × ×

帰る茂木を見送る政岡。  
茂木「じゃあ、政岡さんも来てよ。今日の集会。俺らみたいなはみ出し者は、来ないと村八分にされちゃうよ」

政岡「もう同じようなもんだ」

茂木「ははは、確かに」

○同・玄関

政岡が戻ってくる。玄関先に、リンの靴が片方だけ転がっていることに気がつき、それを下駄箱の奥にしまいこむ。政岡が顔を上げると、奥からリンがその様子を見ている。

政岡「……一晩だけだぞ」

リン、やや嬉しそうに頷く。

○同・二階（夕）

リン、腕に巻いたミサガをじっと見ている。強く引っ張って切ろうとするが切れない。  
政岡が突然襖を開け、入ってくる。



リン、一瞬かなり怯えた様子を見せる。

政岡「……あんだ、名前は」

リン「リン・メイユイ……」

政岡「俺は政岡だ。さっさと知り合いに電話して迎えに来てもらえ」

政岡、リンに電話の受話器を渡す。

政岡「下には絶対降りるな」

政岡が去り、リンは子機を見つめる。

○集会所・前（夕）

平屋建ての建物。

そこに歩いてやってくる政岡。

○同・中（夕）

畳敷きの広い部屋には、すでに農家を中心とした村民が集まっている。

前方にはホワイトボードが置かれ、その前に富田と境が立っている。

遅れて入ってきた政岡、最後列に座っていた茂木の隣に腰を下ろす。

境「逃げたのは、リン・メイユイ、23歳。中

国人です。禁止していた携帯の所持が発覚したので、富田さんが没収。さらにそこか

ら特定の異性と頻繁に接触していることが判明したため、私も同席のもと、契約違反

であること、帰国もやむおえないことを説明していました。納得していた様子でした

が突如逃走したというわけです」

政岡、境を見ている。

政岡「（茂木に）あれは？」

茂木「協同組合の境さん。ここらの農家に外国人研修生を斡旋してる。もともと東京の人材派遣会社で働いてた、やり手らしいよ」

村民たち、ざわついて矢継ぎ早に質問する。

村民A「で、見つかったのか？ その子」

村民B「早くなんとかしてくれよ。うちの奴らも触発されて逃げられちゃ困る」

村民C「労基とか大丈夫だろうね。うちだつて後取りいなくて大変なんだから」

富田「わかってるよ！」

境「もちろん、こちらとしても、彼女が労働基準監督署や支援団体などに逃げ込む前に見つけ出すつもりです」

富田「だからみんな協力頼むわ！ な？」

境「あと、同じように研修生を抱えていらつしやる皆さんはですね、今後このような安易な逃走を防ぐため、給与通帳と印鑑、キヤッシュカード、また、パスポートは、必ず雇い主が保管するというのを徹底してください。あと、携帯電話の所持禁止も」

納得したように頷く村民たち。

茂木「（小声で） 奴隷だな、これじゃ」

政岡「……」

富田、ホワイトボードに貼られたリンの写真を叩き

富田「こいつみたいに全部置いて逃げるバカもいるけどな」

境「彼女は、まだこのあたりに潜んでいる可能性もあります。みなさんも周りで不審なことがあれば、どんなことでも構いませんので報告してください」

富田「しばらく、交代で橋に見張り立てるつもりだから、よろしく」

政岡、冷めた目で集会を眺めている。

○同・前（夜）

ゾロゾロと帰る村民たちに混じり、政岡も出てくる。そこに境が声をかける。

境「政岡さん、ですよね？」

政岡「（不審な目でみて）……」

境「あ、いや、このあたりで、うちから研修生を派遣してこないの、政岡さんのところぐらいなので……もしかして研修生に興味をお持ちに？」

政岡「来いって言われたから来ただけだ」

境「そうですか。でも、大変でしょう。お一人じゃ。うちでいい子紹介しますよ」

政岡「そのいい子が、なんで逃げ出したりするんだよ」

境「……」

政岡、去っていく。

境の元に富田が近づく。

富田「境さん、あんな安全運転だけが取り柄の農家バカほっときなさいって。畑にぼっか種まいて女房にまかないから子供もいない。それで2年前に奥さんボケちゃってさ。悲惨だね、悲惨」

境、去っていく政岡を見つめる。

○政岡家・二階の和室（夜）

リン、子機を握りしめたまま固まっている。外から車が到着する音。リン、慌てて部屋の明かりを消す。

○同・玄関（夜）

百江が介護施設のワゴン車から雪を降ろし、連れて入ってくる。

百江「こんばんはー。戻りましたー」

百江、返事がないのでそのまま雪を連れて家にあがる。

○同・居間（夜）

百江と雪が入ってくる。百江、雪を椅子に座らせてやる。

散らかった部屋を片付け始める。

○同・二階の部屋（夜）

リン、立ち上がるうとして床がきしむ。

○同・居間（夜）

天井からミシッと軋む音がし、百江、不思議そうに見上げる。

○アーチ橋（夜）

政岡、橋の前を横切る。

橋の出口付近で、村人たちが懐中電灯を片手に、通る車をチェックしているのが見える。

政岡「（それを見て）……」



政岡「みたいって……何でちゃんと見てなかったんだ！」

百江「……ごめんなさい」

政岡「やっぱり他人に任せるとろくなことがない」

百江「他人って……そんな言い方」

政岡「帰ってくれ」

百江「(腹が立って)わかりました。それじゃあこれからは全部自分でやってください！」  
百江、出て行く。

政岡「……」

政岡、百江を気にしつつも、追いかけるられない。

○同・雪の部屋(夜)

介護ベッドに雪を寝かせてやる政岡。  
雪「(混乱状態で)あなた、あの子は、美幸は……」

政岡「大丈夫、大丈夫。もう寝よう」

部屋の隅、棚の上に埃をかぶった小さなヌイグルミが置いてある。

○同・二階(夜)

政岡が、お盆に簡単な夕食を乗せてくる。襖を開けると、再びリンがビクツと身を固くする。

政岡「……食え」

リン、それを受け取る。

リン「ありがとうございます」

政岡「俺はお前にも富田にも興味はないし、何があったか聞く気もない。さっさと出てってくればそれでいい」

リン「……」

政岡「いつ迎えに来るんだ、知り合いは」

リン「……」

政岡「電話したんだろ？」

リン、首を横に振る。

リン「番号、わからない……携帯、富田さんにとられたから」

政岡「(呆れて)どうするつもりだ」

リン「お願いがあります」  
政岡「……」  
リン「隣の町まで、連れてってほしい」  
政岡「……」

○スーパー・バックヤード  
商品のダンボール箱を運んでいる

ワンシウイン  
王 秀英（28）。（以降ワンと表記）

先輩店員が王の尻を蹴る。

先輩「ワンさんさー、全体的に遅いんだよね」  
ワン「（めげずに）はい、すいません」

ワンの腕には、リンとお揃いのミサング。

ワン、先輩が去ったのを見て、ポケットから携帯を取り出す。待受にはリンとのツーショット写真。

○同・政岡家・二階の部屋（夜）

先ほどの続きで向かいあう政岡とリン。

リン「その人、そこにいる」

政岡「無理だ」

リン「（驚き）どうして？」

政岡「今は見張りがきつい。それに、万が一捕まったりしたら……」

リン「捕まる？」

政岡「……とにかく、俺はこれ以上関われない。車が必要ならタクシーでもなんでも呼んでくれ」

リン「警察言う、いいですか？ 事故のこと」

政岡「そんなことしたら、お前も富田のところに連れ戻されるぞ。いいのか」

リン「……」

政岡「どっちにしろ、明日には出てってくれよ。これ以上厄介ごとはごめんだ」

政岡、出て行く。

○同・二階（深夜）

膝を抱えてうずくまっていたリン、ミサングをじっと見つめ、立ち上がる。

○同・階段（深夜）

リン、忍び足で階段を降りる。

○同・玄関（深夜）

リン、玄関の靴を物色している。

雪の靴を履いてみるが、小さくて入らない。無理矢理履こうとして、捻挫した足が痛む。声を殺して痛みに耐える。リン、靴を脱ぎ捨て、途方にくれる。廊下の奥から物音がして、リンとつさに隠れる。

○同・廊下（深夜）

物陰から階下を見ているリン。

政岡が、雪を支えながら、雪をトイレに連れて行くところ。

リン「（見ていて）……」

○同・外観（朝）

朝日が家を照らす。

○同・二階（朝）

政岡、襖を薄く開ける。

リンは布団で寝ている。

政岡、それを確認し、そっと閉じる。

○アーチ橋

政岡の軽トラが来る。村人が2人立っていて、止まれと合図。政岡従う。

村人A「悪いね、政岡さん。一応決まったことだから」

と、車内を見渡す。

政岡「……」

村人B「まあ、もうじき終わるよ。あいつのいる場所、わかったみたいだから」

政岡「え？」

村人A「隣のセイヨーマートの店員。それが恋人らしいんだわ。一晩探していないんだから、そいつのところに逃げたんだろうって」

政岡「……」

○国道

走る軽トラ。  
道路の左右には『全国交通安全週間』  
のノボリが。  
政岡、警察がいないか注意しつつ運転  
する。

○ガソリンスタンド

政岡の軽トラが入ってくる。

店員の若い男が迎える。

× × ×

店員「はい。でもこれくらいなら僕やりますよ」

政岡「新人か」

店員「すいません、店長まだ来てなくて」

政岡「助かるよ」

店員「じゃ、すいませんけど一応」

店員「免許証、お預かりすることになってるんで」

政岡「……」

店員「どうしました？」

政岡「悪い、やっぱり今日はやめておく」

政岡、そそくさと軽トラに乗り込み走り出す。店員、不思議そうに見送る。

○政岡家・二階の部屋

リン、目を覚ます。下腹部に鈍痛があり、手を当てる。リン、ハツとして布団から立ち上がる。布団のちようどお尻のあったあたりに赤い血のシミ。

○同・トイレ

リン、上部に取り付けられた棚を探っている。生理用ナプキンはあるはずもなく。介護用オムツの袋が目に入る。



リン、思いつきそれをおろしてみるのが、  
中身は空。

リン「……」

○同・廊下

リン、そっと歩く。雪の部屋の前を通  
る時、部屋の中に介護用オムツのスト  
ックが置いてあるのを見つける。  
リン、部屋の中に誰もいないのを確認  
しつつ、オムツに近づき、一つ取ろう  
とする。

雪の声「美幸？」

リン、驚いて振り返る。

雪が立っている。

○同・前

政岡の軽トラが帰ってきて作業場内に  
停められる。  
降りてきた政岡、軽トラをしばらく見  
つめるが、作業場のシャッターを下ろ  
す。

○同・玄関

政岡が入ってくると、奥から楽しそう  
な声。政岡、驚き慌てて入る。

○同・台所

雪は小鍋で小豆を煮ている。  
リンはもち米を洗っている。

雪「そうそう、上手ね」

政岡、入ってきて

政岡「なにやってる。なんでここに」

リン、驚いて笑顔が消える。

雪「あなた、おかえりなさい」

政岡「……雪」

政岡、元気だった頃の雪に戻ったよう  
で、戸惑う。

雪「今日、お赤飯なの。ね、美幸」

と、意味深気にリンを見て笑う。  
リン、困ったように笑う。

雪「今日はおめでたい日なのよ」

政岡「やはり雪が混乱しているだけだと気がつき、雪に近づき、コンロの火を止める。」

政岡「雪さん、この子は美幸じゃない」

雪「え？でも……」

政岡「あの子は、この世にいない。何度も言っただろ。俺たちに娘なんかいない」

雪「一気に混乱した様子。」

雪「でも、でも」

リン、二人の様子を呆然と見ている。

### ○同・居間

食卓を囲む3人。

政岡は、雪の口元まで食事を運ぶが、雪はパイと顔をそらす。

政岡「……食べてくれよ、頼むから」

雪、口を真一文字にして開かない。

政岡、諦め、疲れた様子で肩を落とす。

リン「……美幸、誰ですか？」

政岡「お前には関係ない」

リン「おばあちゃん、美幸のおめでたい日だから、おせきはん作る言ってた」

政岡「おめでたい日って……（察して）」

リン「すみません……あれ借りました」

リン、部屋の隅に置かれたオムツのストックを指す。

政岡「……とにかく、美幸なんて子はいない。気にするな」

リン、頷きキャベツの浅漬けに箸を伸ばし食べる。

リン「……美味しいです」

政岡「富田さんのところと大して変わらないだろ」

リン「（寂しそうに）……そんなに食べたことない。売り物だから」

政岡「……」

リン「本当に、美味しいです」

と、どんどん食べる。雪、その様子を見ていて

雪「お父さん、私も、私も」

政岡「（驚きつつ）ちよつと待って」

と、雪のご飯にキャベツの浅漬を乗せてやる。雪、美味しそうに食べる。

政岡、驚きつつも微笑む。

リン「：：お願いがあります」

政岡「連れていけないぞ、隣町になんか」

リン「違う：：もう少しここにいたい」

政岡「：：」

リン「足の怪我、治るまで。治ったら、自分で出て行く」

政岡「馬鹿なこと言うな」

リン「その間、おばあちゃんの面倒、私見ま

す」

政岡「：：」

リン「お願いします」

リン、頭を下げる。

政岡、笑顔で食事をとる雪を見て

政岡「：：」

○セイヨーマート・バックヤード

ワンがスーパリーの店長に連れられ、富田と境が待っているところに連れてこられる。

境「ワンさん、ですよね？」

ワン、頷く。

境「リンさんの居場所、知ってるかな？」

ワン、怯えつつ大きく首を横にふる。

富田「嘘つくな、この野郎。さっさとあの女返しやがれ」

境「ちよつと富田さん、落ち着いて」

ワン「（怯えつつ）嘘じゃない。知りません。ずっと連絡取れない」

富田「あたり前だろ。俺があいつの携帯持ってんだから」

富田、胸からストラップで下げたリンの携帯を見せびらかす。

ワン「そんな：：でも、本当に知らない」  
境、思案している。

○政岡家・廊下

作業着に着替えた政岡が、雪の部屋の  
前を通りかかる。リンが雪の着替えを  
手伝っているのが見える。

リン「(気がつき) 行ってらっしゃい」

政岡、黙って出て行く。

○キャベツ畑

政岡、広い畑の中、一人黙々と収穫作  
業をしている。キャベツ、ところどこ  
ろ虫に食われ、手入れが行き届いてい  
ないように見える。

政岡「(ため息をつく) ……」

隣の畑では、外国人研修生たちが作業  
している。

○農道

政岡、キャベツを積んだ荷押し車を歩  
いて運んでいる。バランスを崩し、キ  
ャベツが数個転がる。

そこに、富田のセダンが通りかかり、  
停まる。窓が開き、富田と助手席に座  
った境が見える。

富田「政岡さん、車どうしたの？」

政岡「：：ちよつと調子悪くてな」

富田「つたく、いい加減買い替えなよ、あの  
オンボロ」

窓を閉めようとする富田に、思わず

政岡「どうだ、その後」

富田「あー逃げたやつのこと？ さっぱりだ  
よ。男のどこにも行ってないみたいだし」

政岡「：：そうか」

富田「政岡さんも協力してよ。同じ男やもめ  
なんだから、人がいない苦労わかるでしょ」

政岡「：：」

富田「あ、政岡さん、この嫁さんは、まだ生  
きてるんだっけか。悪い、悪い」

政岡「：：」

富田「じゃあ」

富田の車、去っていく。

○走るセダン・車内  
助手席の境、振り返りリアガラス越しに遠ざかる政岡を見る。  
富田「効率が悪いやりかたしかできないんだよ、あの人」

○商店・店内  
村の中にある小さな商店。  
買い物かごに食品などを入れた政岡、生理用ナプキンの前で立ち止まっている。適当に一つ入れる。

○同・レジ  
レジを打つ女性店員。生理用ナプキンと政岡を交互に見て、不審がりながらもレジに通す。  
政岡「……女房が使うんだよ。文句あるか」  
店員、首を激しく横に振る。

○政岡家・外（夕）  
政岡、荷押し車を押して帰ってくる。

○同・居間（夕）  
政岡が入ってくると、机の上には中華料理が並んでいる。驚く政岡。  
回鍋肉の入った皿を持って、リンが台所から来る。  
リン「おかえりなさい」  
「楽しみに料理を眺めている雪。」  
雪「すごいねー。美味しそうですねー」  
政岡「そうだな」  
政岡、楽しそうな雪を見て笑みがこぼれる。

○同・作業場（夜）  
政岡が一人、出荷作業をしている。そこにリンが来る。  
リン「手伝います」  
政岡、無言でそれを受け入れる。  
丁寧にかやべつを扱う政岡。

リンは少し雑。政岡、それを見て  
政岡「もっと丁寧に」

リン「……はい」

政岡「傷がつくと値が落ちる。何教えてもら  
ってたんだ、富田のところで」

リン「……」

政岡「……中国に帰りたいたいと思わないのか」

リン「帰りたい。でも、帰れない」

政岡「……」

リン「みんな、日本に来る時、借金してる。  
日本なら、それ以上に稼げる聞いたから。  
でも嘘だった。日本にいい思い出全然ない  
けど、このまま中国帰るの、もっとダメ。  
人生終わり」

政岡「……」

リン「政岡さんは、どうして私たち雇わない？」

政岡「嫌いなんだ。他人にあれこれ指示した  
り、畑に勝手に入られるのが」

リン「でも、一人じゃ大変」

政岡「なんとかするんだよ、自分で」

リン「……」

政岡「すぐ他人に頼ろうとする奴は、ろくな  
やつじゃない」

リン「……すみません」

政岡「別にお前のことじゃないが」

リン「私もなんとか、する」

政岡「……」

リン「怪我が治ったら、なんとかする。自分  
で」

政岡「そうか」

政岡、神妙な面持ち。

○ガソリンスタンド（夜）

働いている茂木と店員。

茂木「何？ 政岡さん来たの？」

店員「はい。でも、免許証見せてって言った  
ら、やっぱいいって」

茂木「そのまま帰らせたのかよ」

店員「はい」

茂木「馬鹿。こんな田舎の店で、マニュアル

通り対応してどうすんだよ……いいよ、俺が明日行くから」

○政岡家・玄関（朝）

出て行く政岡を見送るリンと雪。

リン「行ってらっしゃい」

政岡「ああ」

政岡、下駄箱にリンの靴が片方しか入っていないことを思い出す。

政岡「……何センチだ」

リン「え？」

政岡「足のサイズ。靴がなきゃ、逃げられないだろ」

リン、笑みがこぼれる。

○畑

政岡、黙々と収穫作業。

隣の畑の中国人研修生と目があう。

政岡「暑いな、今日」

中国人研修生、話しかけられたことに驚くが、頷く。

○政岡家・居間

リン、転んだ際に破けたズボンを、裁縫セットを使い縫い合わせている。

その隣で雪は椅子に座り、うたた寝。

裁縫セットの中に、刺繍糸の束が数本あるのが目に入る。

リン「（思案し）……」

×

リンがミサンガを編んでいる。

×

一本編みあがり、寝ている雪の腕につけてやる。

○商店

レジの後ろに貼られた『××中学校指定

体育館シューズ取り扱い店』の張り

紙を見ている。

先日と同じ女性店員、不審そうに政岡を見る。

政岡「(ギロツと睨み)これも女房が使うんだよ。悪いか」  
店員、再び首を横にふる。

○政岡家・作業場(夜)

政岡とリンが、キャベツの箱詰め作業をしている。  
政岡、男物のサンダルを履いたリンの足元を見る。  
政岡、立ち上がり袋を持って戻って来る。

政岡「これ、使え」

中身は体育館シューズ。

リン「(笑顔になり)ありがとうございます」  
早速履いてみる。サイズはピッタリ。  
嬉しそうなリンを、政岡も満足そうに見ている。

リン「私も、これあげます」

リン、ポケットからミサंगाを取り出す。政岡の腕をとり、巻きつける。

リン「これ、お守り。これが切れた時、願い事かなう」

政岡「……」

背後で物が落ちる音。

政岡とリン、慌てて振り返る。  
工具ボックスを床に落とし、茂木が立っている。

政岡「！」

茂木「……政岡さん、その子って……」

政岡「……」

○集会所(夜)

境、富田、村人たちが集まっている。

村人A「結局まだ見つかってないの？」

富田「(居心地が悪く)……」

境「はい。もしかしたらすでにどこかの支援団体に逃げ込んだのかもしれない」

村人B「困るよ。これで研修生の使用が止められちゃったら、死活問題なんだから」

富田「わかってるよ！ それより、村にまだ



いる可能性はどうなんだよ。なんか見たや  
ついでないのか？」

そこに、商店の女性店員が、お盆にお  
茶を乗せてやってくる。

店員「(村人Aに) あんた、あのこと」

富田「なんだ？」

村人A「ああ、政岡さんのことなんだけど。

こいつが、ちよつと怪しいって言うんだよ」

富田「政岡？」

境、不審げに話を聞く。

店員「急に、生理用のナプキン買ったり、体

育館シューズ買ったりしはじめて」

村人A「もしかして、若い女がいるんじゃない

いかって。なんか隠してるのかもしれない」

富田「……あいつ」

境「調べてみる価値はありそうですね」

○政岡家・作業場(夜)

茂木と政岡、向かい合っている。

政岡の少し後ろにリン。

政岡「(リンに) 雪のこと見ててくれ」

リン、戸惑いつつも、家の中へ戻って  
いく。

政岡、それを見送り。

政岡「富田には言わないでくれないか」

茂木「(動揺して) ……でも」

政岡「そのうち出て行く。迷惑はかけない」

茂木と政岡、黙ったまま見つめ合う。

茂木「(根負けして) ……わかったよ」

政岡「すまない」

茂木「この村で肩身の狭い思いしてるものど  
うし、助け合わないとね」

政岡と茂木、薄く微笑む。

茂木「この前、うちの店に来たんだって？ な  
んで急に帰ったの？」

政岡「……」

茂木「ま、いいけど。どうしても俺に直して

欲しいんだな、政岡さん」

政岡「そういうことにしておいてくれ」

茂木「はいはい」

政岡、工具ボックスを開け、ブレーキランプを交換する作業に移る。そこにリンが駆け込んでくる。

リン「おばあちゃん、いない！」

政岡「何？」

リン「どこにもいない！」

政岡、家の中へ駆けていく。リンと茂木もそれに続く。

○同・居間（夜）

政岡たちが入ってくる。

いつも雪が座っている椅子に姿がない。政岡、隣の寝室へ。

○同・雪の部屋（夜）

ベッドにも雪の姿はない。

風が吹き込んできて、縁側の戸が開きっぱなしになっていることに気がつく。

政岡「！」

政岡、慌てて縁側の外に出るが、雪の姿はない。

政岡「雪！ 雪！」

○同・作業場（夜）

政岡、走ってきて、停めてあった軽トラに乗り込む。

茂木とリン、追いかけてくる。

茂木「政岡さん、それまだ（ブレーキランプが）」

政岡、無視してエンジンをかける。

リン、運転席に駆け寄り

リン「私も一緒に探します」

政岡「お前には関係ない！ どけ！」

政岡、リンをはねのけ、軽トラを乱暴に発車させる。

リンと茂木、呆然とそれを見送る。

○農道（夜）

暗い道を、軽トラが走る。

○同・走る軽トラ・車内（夜）  
政岡、雪を探しながら、運転している。

○同・走るセダン・車内（夜）  
運転席に富田。助手席に境。

境「いいですか富田さん、政岡さんの家に着いたら、冷静に行動してくださいね。日本人どうしのトラブルはちよつと……」

富田「（遮り）わかってるよ。だいたい俺は最初から、あいつが怪しいと思ってたんだ」  
対向車線に政岡の軽トラ。すれ違う際、運転している政岡が見える。  
思わず振り返る富田。

富田「今のまさか……」  
境も驚いて振り返る。  
富田、ブレーキを踏み、Uターン。

○同（夜）  
走る軽トラ。その少し後ろに富田のセダンがついてきている。

○同・走る軽トラ・車内（夜）  
運転している政岡。左右の畑を気にしているの、バックミラーに映るセダンに気がつかない。

○同・走るセダン・車内（夜）  
追いかける富田と境。

富田「あいつまさか、リンを連れて逃げるつもりじゃ」  
境「……」

○同・走る軽トラ・車内（夜）  
左右の畑を気にしつつ運転する政岡。  
キャベツ畑の中に、雪がしゃがみこんでいるの見える。

政岡「！」  
政岡、慌てて急ブレーキをかける。

○同（夜）

軽トラ、ブレーキランプが光っていない。

○同・走るセダン・車内（夜）

目の前で軽トラが急停止。

境「危ない！」

富田「え？」

富田、軽トラが停まったことに気がつきブレーキを踏むが、スピードを落としきれず：

○同（夜）

鈍い音がして、軽トラの後部にセダンがぶつかる。

○同・軽トラ・車内（夜）

政岡、衝突の衝撃を受ける。

一瞬何が起こったのかわからず混乱するが、すぐに雪のことを思い出し、外に飛び出す。

○同（夜）

政岡が降りてきて、畑の方へ走り出す。

富田と境もセダンから出てくる。

富田「おい！どこ行くんだよ」

境、携帯を取り出し電話をかける。

境「あ、警察ですか。衝突事故で……」

富田「政岡！逃げるのか！」

富田、慌てて軽トラの中を見るが、リンがないので呆気にとられる。

政岡、富田たちを気にせず、どんどん進む。

○キャベツ畑（夜）

雪がしゃがみこんで、キャベツを見ている。

政岡「雪！」

雪「（気がつき）あなた」

元気だった頃に戻ったような様子。

雪「駄目じゃない、こんなに虫食いが」

と、キャベツを指す。

政岡「……雪、お前」

雪「私のことより、畑のこと見なきゃ。あなた、全部うまくできるほど器用じゃないんだから」

政岡「……」

雪「ここで採れる野菜が、私たちの子供ですよ」

政岡、雪を抱きしめ涙を流す。

雪「（微笑み）ちよつと、なーに急に」

遠くからパトカーのサイレン音が聞こえてくる。

サイレンの音に政岡の記憶が呼び起こされる。

○（回想）政岡家・玄関

政岡（32）が、妊婦の雪（28）に見送られていく。

政岡「大丈夫か？ 一人で」

雪「大丈夫、大丈夫。私のことより、畑のこと見なきゃ。あなた、全部うまくできるほど器用じゃないんだから」

政岡、微笑み出て行く。

○（回想）キャベツ畑

政岡がキャベツの世話をしている。冷害で駄目になったキャベツが辺り一面に。

遠くで、救急車のサイレンの音。

政岡、ハツとして音のした方を見る。

○（回想）病院・病室

泥だらけの政岡が駆け込んでくる。

雪が青白い顔でベッドで寝ている。

お腹は平らになっている。

雪「あの子は？ 美幸は？ どこにいったの？」

雪の目から涙。政岡、呆然と立ち尽くす。

○（回想）同・廊下

肩を落とし歩く政岡。  
患者たちの噂話。

患者Aの声「あとちよっと早ければ間に合っ  
たかもって」

患者Bの声「あんな田舎で救急車なんか呼ぶ  
から……誰も送ってあげられなかったのか  
しら」

政岡、手に持っていた子供用のぬいぐ  
るみをギュッと握る。

（回想終わり）

○農道（夜）

追突事故の現場に、青木や警察官が数  
人。

政岡、富田と境、それぞれ事情を聞  
かれてる。

青木「だからすぐに取り替えてくださいって  
言ったじゃないですか」

政岡「……」

青木「やだなー俺、政岡さんに切符切るの」  
政岡「青木くん」

政岡、真剣な表情で青木に免許証を出  
す。

青木、何気なくそれを受け取り、見て  
驚きの表情。

政岡「すまなかつた」  
政岡、頭を下げる。

○政岡家・作業場（夜）

うづくまっているリン。  
茂木、どうしていいかわからず手持ち  
無沙汰。

茂木の携帯に着信。

茂木「母ちゃん、今ちよっと……え？ なん  
で？ ちよ、ちよっと待ってすぐ行く」

電話を切り

茂木「政岡さん、逮捕されたって」  
リン「！」

茂木「俺、ちよっと見てくる」

茂木、リンを置いて出て行く。  
リン、どうしていいかわからず途方に暮れている。

○農道（夜）

茂木が事故現場に到着する。  
野次馬が数人集まった辺りに近づく。  
百江に支えられた雪もその場に。  
政岡はパトカーに乗せられようとして  
いるところ。

野次馬 A 「無免許運転だつて」

野次馬 B 「いくら安全運転できるからって、

ダメなもんはダメだよねえ」

茂木「（聞いていて）……」

政岡が雪の方を見る。

雪、子供のよな表情に戻っている。

政岡「頼んだぞ！」

百江、雪のことだと思ひ頷く。

茂木、リンのことだと思ひ頷く。

○政岡家・居間（夜）

リン、紙に何かを書いている。

書き終わり、決意した表情で立ち上がる。

○同・縁側（夜）

リン、体育館シューズを履き、痛みの残る足を気にしながら、歩き始める。

○走る軽自動車・車内（夜）

百江が運転している。

助手席には雪。

百江「雪さん、今日はうちに泊まろうね」

雪、腕についたミサングをいじっている。

百江「（気がつき）雪さん、いいわね、それ」

雪「いいでしょう。リンちゃんがくれたの」

百江「（記憶の混乱だと思ひ）リンちゃん？

そんな友達いたっけ？」

雪「そう。とっつてもいい子なのよ」

雪、ニコニコと微笑んでいる。

○政岡家・庭（夜）

後部が凹んだ軽トラを、茂木が運転して帰ってくる。

○政岡家・居間（夜）

茂木、入ってくる。

リンの姿はなく、机の上に置かれた手紙を見る。

茂木「……」

○農道（夜）

草陰に隠れ、車が通りすぎるのを待っているリン。手首のミサंगाを強く握る。

車が通りすぎたのを見て、ゆっくり立ち上がり、精一杯の速度で歩き始める。

○商店・前（夜）

リン、道と畑の間の傾斜になっている部分を利用し、隠れながら歩いてくる。商店の前に一台のバンが停まっているのに気がつく。

バックドアを開け、スタッフがダンボール箱を店の中へ運んでいる。

トラックにはダンボールなどが積まれ、人が隠れられそう。

リン、店の中を見る。

配達スタッフと女性店員、噂話に花を咲かせている。

リン、決意してバンの方へ駆け寄る。

× × ×  
配達スタッフが店員に挨拶し、バンに戻ってくる。バックドアを閉める。リン、荷物と荷物の間に小さくなって隠れている。

○アーチ橋（夜）

リンの乗ったバンが到着する。



村人AとBが見張りに立っていて、車を停める。

村人Bが配達員の男に事情を説明し、村人Aがバックドアを開ける。

ダンボールの陰に隠れているリン、緊張し身を固くする。

村人A、注意深く中を観察。

村人A「お兄ちゃん、ちよつと」

リン「：：」

村人A「これ、もっと入れてくれよ。すぐ売り切れて困るんだよ」

と、積まれた商品のダンボールを叩く。

販売員「そういうの僕に言われても：：」

村人A「頼むよ」

村人A、ドアを閉める。

車内のリン、ホッと息を吐く。

しかし、体が積み上げられたダンボールにぶつかり、バランスを崩して箱の中に入っていた缶詰がぶちまけられる。

激しい音が出る。

村人A、音に気がつき再びバックドアを開ける。懐中電灯を向けた先にリンがいる。

○富田家・一室（夜）

窓のない洋室。

リンがうずくまっている。

富田と境が来て、ポストンバックを投げ入れる。

富田「散々な日だと思ってたが、最後の最後にいいこともあるもんだな」

リン「：：」

境「リンさん。契約違反は契約違反だからね。

明日帰ってもらいます。中国ではどうか知らないけど、日本ではルールは守らない方が悪いんだから」

リン「私、まだ帰れません。お金足りない」

境「今までの給料は、明日ちゃんとお渡ししますから」

富田「金、金、がめついこと言うんじゃない

よ。日本の技術を学べただけでも儲けもんだろ」

リン「何も学んでない！」

富田「何？」

リン「あなたから何も学んでません。ただ、ずっと働いた。それだけ」

富田「(鼻で笑い)それは学ぶ側の意欲の問題だろ」

富田と境、出て行く。

リン「(悔しくて)……」

扉に外側から鍵がかけられる音がする。

○政岡家・作業場(夜)

茂木、後部の凹んだ軽トラを見ている。工具を取り出し、ブレーキランプをつけ変え始める。

○富田家・一室(夜)

リンがうずくまっていると、部屋のドアが乱暴に開き、酒で顔を赤く染めた富田が入ってくる。

リン、怯えて部屋の隅へ。

富田「おいおいおい、逃げるなよ。最後にいい思い出せろうよ。な？」

リン、部屋の隅から隅へ、逃げ惑う。

富田「俺は結構気に入ってたんだから、お前のこと」

リン、富田が首からリンの携帯電話をぶら下げていることに気がつく。

しかし、捕まってしまう。

必死に抵抗するが、力の差に勝てない。押し倒される。

リン「(中国語で)やめて！ やめて！」

大声で叫ぶリン。

富田「うるせー日本語しゃべれ。ここ日本だぞ」

リンを殴打。リン、恐怖で声が出なくなり、抵抗をやめる。

そこに、境が慌ててくる。

境「富田さん！ それはまずい！」

富田の声「こいつは俺が金出して買ったんだ！ 何で駄目なんだよ！」

境、富田をリンから引き離し、連れて行く。

リン、ぶるぶると震えている。

境が戻ってくる。

境「何も起こらなかった。いい。何も起こらなかったんだ」

境、自分に言い聞かせるように呟くと、再びドアに鍵をかけて去る。

リン、恐怖と安堵でとめどなく涙が溢れ、嗚咽し始める。しかし、その手には抵抗中に富田から奪い返した自分の携帯を、しっかりと握りしめている。

× × ×  
リン、部屋の片隅でワんに電話をかける。電話は繋がらず、留守電になる。

リン「(中国語で) もう会えない。さよなら」  
リン、絶望の表情で電話を切る。

### ○朝の風景

一見美しい田舎の風景。朝日が山々や畑を照らす。

### ○警察署・前(朝)

青木と百江に付き添われ政岡が出てくる。

百江「大変ご迷惑おかけしました」

青木「軽い接触事故で、幸い怪我人もいませんし。それに、これまで政岡さん、無事故無違反でしたからね。後は裁判次第ですけれど、罰金ですむかと」

百江、さらに恐縮して頭を下げる。

青木「あ、そうだ。見つかったそうですよ。」

富田さんのところの研修生」

政岡「(驚き) え？」

青木「今日、中国に帰るみたいです。いやー

昨日は久々に濃い一日だった」

政岡「……」

○走る軽自動車・中（朝）

百江が運転している。助手席に座る政岡。

百江「お義姉さん、しばらくうちのホームで預かることにしたから」

政岡「ああ……」

百江「だから言ったじゃない。頼って欲しいって。一人で畑と介護、ぜんぶ背負い込んで、そのせいで免許の更新忘れるなんて……」

：バカじゃないの」

政岡「……悪かった」

百江「嘘までついて。何がしたかったのよ、

お兄ちゃん」

政岡「……守りたかったんだよ」

百江「……」

政岡「次こそ、自分の手で」

政岡、手首に巻いたミサガを見る。

百江、それに気がつき。

百江「それ、お揃いなんだ」

政岡「え？」

百江「雪さんも同じのつけてた。リンちゃんって友達にももらったんだって。いい子なのよって、ニコニコして」

政岡「そうか……」

○政岡家・居間（朝）

誰もいなくなった部屋に政岡が戻ってくる。静かで寂しい。

○同・雪の部屋（朝）

飾られたぬいぐるみを見ている政岡。

○同・作業場（朝）

政岡が入ってくる。すると誰かのイビキが軽トラの方から聞こえる。

政岡、不審に思い近づくと、軽トラの荷台で茂木が寝ている。

政岡「おい」

茂木「（目を覚まし）あれ、政岡さん。もうお

勤め終わったの？」

政岡「何やってんだ」

茂木「あー……お詫びにこの車修理しようと思ってる」

茂木、ポケットからリンの手紙を出す。

『自分でなんとかします　リン』

政岡「……」

茂木「ごめん。あの後、戻ってきたらもういなくて。昨日、政岡さんに頼まれたのに」

政岡「……なあ、このオンボロ、まだ走れるのか？」

茂木「え？　まあ、後ろが凹んだだけで他は異常ないみたいだったけど……」

政岡「助かるよ」

政岡、運転席に乗り込もうとする。

茂木、慌ててそれを止め

茂木「いやいや、政岡さん。ダメですよ。今、無免許でしょ？」

政岡「大丈夫。もう事故は起こさない」

茂木「そういうことじゃなくて」

政岡「走りたいんだよ。最後まで誰かのために」

茂木「……」

政岡、エンジンを入れて発車させる。

茂木、その後ろ姿を眺める。

○富田家・前（朝）

真新しいワゴン車が停まっている。

富田、それを大事そうに磨く。

リンが協同組合の男性職員らに連れられて出てくる。

富田、リンに現金の入った封筒を差し出す。

リンが受け取ろうとすると、それを制し封筒から10万円を数えて抜きとる。

富田「これ、帰りの飛行機代ね」

リン「……」

リン、薄くなった封筒を握りしめる。

○農道（朝）

軽トラが来て、政岡が降りてくる。  
農作業していた研修生を見つめる。  
研修生たちも政岡に気づき、見ている。  
政岡、彼らの方へ一歩近づく。

○農道（朝）

富田のワゴン車が走っている。

○同・走るワゴン・車内（朝）

運転している男性職員。助手席に境。  
後部座席にリンと富田。さらにその後ろにも2人ほど男性職員が。  
リン、ポーツと車窓を眺める。  
車窓からは、農作業する外国人研修生たちの姿が見える。

富田「よく見とけよ。これで日本は見納めだろ」

リン「もう見飽きた」

富田「ったく、最後まで可愛くないやつだな。顔で選ぶとろくなことがない」

富田、言いつつもリンの太ももに触れ、撫で回す。

リン、富田を一瞥するが、もう抵抗する気力もない。ただ外を見ている。そこに急ブレーキ。

富田「なんだよ！」

職員A「すいません。でも、あれ……」

農道の真ん中に、道を塞ぐように軽トラが停まっている。

境「政岡さんじゃないですか、あれ」

富田「（驚き）なに？」

○同

軽トラから政岡が降りてくる。

富田、境、職員たちも車から出てくる。リンも出てくるが、男性職員にしっかりと腕を掴まれている。

富田「何やってんだ、あんた」

政岡「……」

富田「無免許で逮捕されたところだろ。警察に

通報するぞ」

政岡「その子、もういらんなら、俺が譲り受けるよ」

富田「は？」

政岡「境さん、どうだ？」

境「お気持ちは嬉しいですが、それはできません。人手が必要なら別の子を」

政岡「その子じゃなきやダメだ」

リン、驚いた様子で政岡を見ている。

富田「寝ぼけたこと言っただけで、さっさとどいてくれよ。飛行機の時間が」

政岡「：：：そうか。残念だな」

政岡、どかっとなら、俺を轆いて行っ

政岡「どうしても行くなら、俺を轆いて行ってくれ」

富田「ついにボケたか。おい、どかせろ」

職員A「はい」

職員Aが政岡に近づき、立たせようとする。抵抗する政岡。

すると、職員Aの腕が別の誰かに掴まれる。職員Aが驚いて見ると、それは

農作業をしていた外国人研修生。

政岡の周りに、外国人研修生たちがど

富田「なんだありゃ」

研修生たち、政岡と同じように道路に座わり始める。農道を塞ぐように、研

修生のバリケードができる。

職員Bもかけより、座わりこんだ研修生たちを立たせようとするが、数が足

りずに苦戦する。

職員B「おい、どけよ」

職員A「お前らも国に帰らせるぞ」

乱暴に退かせようとする職員たちに、研修生たちは非暴力で抵抗している。

少し離れ

富田「何やっただよ！ さっさとどかせろ  
って」

境「：：：」

リン、自分の腕をつかんでいた職員C

も、あっけにとられて力が緩んでいることに気がつく。

リン「(思案し)……………」

リン、突然、職員Aの体に体当たり。職員C、バランスを崩し畑の中へ。リン、走りだす。それに気がついた境と富田、捕まえようと手を伸ばすが、一步届かず。職員ともみ合っていた政岡、走ってくるリンに気がつき

政岡「走れ！」

職員を振りほどき、リンに手を伸ばす。リン、必死に走る。

政岡とリンの手がつながる。

二人、軽トラの方へ駆け出す。

富田や境たち、止めようとするが、研修生が人の壁を作り、それを遮る。

政岡とリン、軽トラに乗り込む。

政岡、窓から顔を出し

政岡「ありがとう！」

外国人研修生たち、振り返り領く。軽トラ、思い切り方向転換をして、走りだす。

富田「おい！ 待て！」

小さくなっていく政岡の軽トラ。

富田「……クソっ」

境の声「富田さん！ 乗って！」

富田が振り返ると、境がワゴン車の運転席に。

富田が慌てて乗り込むと、境は勢いよくアクセルを踏む。

富田「(窓から顔を出し)どけ！ どけ！」

ワゴン車、人の壁に突っ込んでいく。研修生たち、散り散りになり、その間をワゴンが進む。

○農道・走る軽トラ・車内

時速60キロを指すスピードメーター。

リン、後ろを気にしながら

リン「もっと速く」



政岡 「それでも、過去最高スピードだよ」  
政岡、さらにアクセルを強く踏み込む。

○同・走るワゴン・車内  
境もアクセルを踏み込む。

○農道  
軽トラとワゴン車のカーチェイスにな  
っている。ワゴン車の方が、だんだん  
追いついて来ているような。

○同・軽トラ・車内  
焦るリン、何度も振り返る。

リン 「追いつかれる！」  
政岡、必死でハンドルを握る。  
ウインカーを出して右折する。

リン 「それ、今いらぬ！」  
政岡 「癖だ！ しょうがないだろ！」

○同・ワゴン・車内  
富田 「富田、軽トラのウインカーを見て  
富田 「こんな時まで安全運転かよ」

○踏切前の農道  
軽トラが右折して入ってくる。  
踏切の遮断機がベルを鳴らし始める。  
少し離れたところに、こちらに向かっ  
てくる電車が見える。

○同・軽トラ・車内  
前方の踏切が降り始めているのが見え  
る。

リン 「ダメ、もう間に合わない」  
政岡 「……捕まってる」  
政岡、歯を食いしばり、アクセルをさ  
らに深く踏み込む。

○同  
軽トラのスピードがどんどん上がる。  
踏切の遮断機が降り始める。

○同・軽トラ・車内  
リン、思わず目をつむる。  
政岡、まっすぐ前を見ている。  
降りてくる遮断機。

○同・外  
軽トラ、ギリギリで遮断機を交わし、  
踏切を渡りきる。  
けたたましく鳴り響く遮断機の音。

○同・軽トラ・車内  
リン、目を開ける。  
振り返ると、後ろには遮断機が下りた  
踏切と、その向こうに富田のワゴン。  
政岡「やった：：やったぞ！」  
リンも笑顔になる。

○同・外  
ワゴン、一足遅れて踏切に到着。  
長い貨物列車が通っていく。  
富田と境、悔しそうに車から降りて  
くる。

富田「くそっ」  
境、冷静に携帯を取り出し電話をか  
ける。  
境「あ、警察ですか。無免許運転の車を発  
見しまして。はい、ナンバーもわかります。  
行き先は多分：：：」

○アーチ橋  
軽トラが渡っていく。

○同・軽トラ・車内  
満足そうな笑顔の政岡。  
リン、後ろを振り返り追っ手がいない  
ことを確認。  
笑顔の政岡を見て、心配になる。

リン「：：大丈夫ですか？」  
政岡「大丈夫。このまま、彼氏のとこまで送  
ってやるよ」

リン「そうじゃなくて、政岡さん、逮捕される？」

政岡「……多分な」

リン「ごめんなさい。私のせい」

政岡「1年や2年、どうってことない」

リン「でも、おばあちゃんは？」

政岡「大丈夫。助けてくれる人は、いるから」

リン「……」

政岡「俺にも、お前にも。きっと」

リン「……」

政岡「何とかなる。大丈夫だ」

リン、泣きそうになる。

### ○介護施設

雪と一緒にいる百江。

窓の外、遠くをパトカーが走っていくのが見える。

百江「(嫌な予感)……」

### ○スーパー・駐車場

政岡の軽トラが到着する。

### ○同・軽トラ車内

軽トラ、停車する。

リン、車内から店内を見る。

ワンが野菜のダンボールを運んでいるのが見える。

政岡「いたか？」

リン、頷く。

政岡「どうするんだ、この後は」

リン「わからない。でも、助けてくれる人いるなら、それ探す」

政岡「そうか」

リン「ありがとう」

政岡「……」  
リン「日本でいい思い出、ちょっとだけできた」

政岡「……いいから、早く行け」

リン、車から降り、深々とお辞儀。

政岡「頑張れよ」

リン、うなずき、小走りで去っていく。  
その後ろ姿を見守る政岡。  
遠くから、サイレンの音が聞こえてくる。

政岡「……」

観念した様子で、椅子に深くもたれかかる。

近くで大きなブレーキ音。

政岡、ハツとして音のした方を見る。  
店に向かおうとするリンを、富田のワゴンが立ち塞いでいる。

政岡「！」

政岡の軽トラのそばにはパトカーが到着し、警察が降りてきている。

○同・外

ワゴンに怯えるリン。

車から降りてきた富田と境。

リンの腕を掴む。

富田「つたく、手間増やしやがって」

リン「いやだ！」

リン、激しく抵抗。

リン「いやだ！ 帰りたくない！ いやだ！」

野次馬が集まってくる。

その様子に、店内にいたワンも気がつく。慌てて出てくる。

○同・軽トラ・車内

政岡、慌てて車から降りようとしたところで、運転席の窓ガラスが叩かれる。

警察官A「政岡さんですよねー？ ちよつとお話いいかなー？」

○同・外

抵抗するリンの様子を見て、別の警察官Bが近づく。

警察官B「あの一、大丈夫ですか？」

境「大丈夫、大丈夫です。身内の問題なんです。民事不介入でしょ、警察は」

リン「いやだ！ 帰らない！」

境は近づこうとするワンを必死に抑えている。

○同・軽トラ・車内

その様子を見ていた政岡、決意した表情。窓ガラスを開ける。

警察官 A 「あなた無免許ですよね」

政岡「(遮り) 離れろ」

警察官 A 「え？」

政岡、アクセルを踏み込み、猛スピードで発車させる。

○同・外

もみ合っているリンたちの方へ、軽トラが近づいてくる。

境「！」

軽トラ、富田のワゴンに激突。ものすごい音がする。

軽トラを避ける反動で散り散りになる境、富田、リンとワン。

富田「何てことすんだ、あんた……」

あっけにとられて政岡を見る一同。

政岡、潰れた運転席で頭から血を流している。

政岡「(リンを見て) 逃げろ……」

リンとワン、ハッとして走り出す。

富田「あ、おい」

富田と境、リンたちを追いかけようとするが、警察官に止められる。

富田「なんだよ」

警察官 B 「これはさすがに刑事事件なんで……」

富田「この車の所有者の方ですよね？」

富田「……」

政岡、走り去っていくリンとワンを見つめ、ゆっくり目を閉じる。

原付に乗った青木が遅れてやって来る。

青木「あーあーあーあー。交通安全週間だつて言ってるのに」

○国道

リンとワン、手をつなぎ後ろを気にしながら走っている。  
風にリンの髪が舞う。

○スーパー駐車場（夕）

警察が現場検証を行っている。  
政岡、ストレッチャーに乗せられ、救急車に運ばれる。  
上空には夕焼けに染まった、綺麗な空。  
鳥が自由に飛んでいる。

○刑務所

刑務所の出口。

T 『1年後』

一礼し、出てくる政岡。

○国道

政岡、歩道を歩いている。  
車がビュンビュンと追い越していく。

○介護施設

政岡が入ってくる。  
百江、涙目で近づく。  
雪、介護士や入居者に囲まれ楽しそう。  
政岡、その様子を見て微笑む。

○ガソリンスタンド

政岡が来る。

茂木 「お勤めご苦労様でした」

政岡 「迷惑かけたな」

茂木 「これ出所祝い」

茂木、小さな鍵を渡す。

政岡 「？」

○農道

政岡が、新品のママチャリをのんびり漕いでいる。

青木の声 「政岡さん」

政岡が振り返ると、原付に乗った青木が来る。

青木「おかえりなさい」

政岡「その節は、すまなかった」

青木「びっくりりましたよ。ドライバーの鏡  
だった政岡さんが」

政岡「……」

青木「ま、もしまた免許取れることになった  
ら、その時は安全運転でお願いしますよ。  
富田さんみたいになると困る」

政岡「？」

青木「あーそうか、知らないのか……あの後、  
富田さんのところに労働基準監督署の調査が  
入って、研修生の使用止められちゃったら  
いいですよ。それでヤケ酒して飲酒運転」

政岡「……」

青木「リンって子からも労働組合通して、い  
ろいろ訴えられてるみたいだし。全部のツ  
ケが一気に回ってきた感じだね」  
政岡「そうか」

○政岡家・外

政岡が自転車に乗って入ってくる。

○同・玄関

政岡がポストを開けると、チラシなど  
と共に、一通の手紙が。送り主はリン。  
政岡、手紙を開く。

手紙の中、切れたミサンガと、

『なんとかなりそうです』  
の拙い手紙。

政岡、微笑む。

○外国人研修生シェルター

ビルの一室。

テーブルで食事をとるリンとワン。他  
の外国人研修生たち。楽しそう。

○農道

政岡が自転車を漕いでいる。  
その横を、荷台に中国人研修生を乗せ  
た軽トラが通りすぎる。

その中の一人と目が会う政岡。  
今は目をそらさず、まっすぐ見つめる。

(了)



参考資料…安田浩一著

『ルポ差別と貧困の外国人労働者』  
(光文社新書)

雑誌『G 2 vol.17』掲載

安田浩一著

『ルポ外国人「奴隷」労働者』  
(講談社)